右ページは現在のローワー・イースト・サイド、左ページがクレイトン・パターソンが撮った90年代の写真。今や流行最先端のエリアであるが、かつてはドラッグの利権を巡りギャングたちが抗争を繰り返す無法地帯であり、数多くのアーティストを生み出した、創造力に満ちあふれたアジール（聖域）でもあった。

なぜ、マンハッタンのゲットーは消えたのか

ジャーナリスト・クレイトンが撮り続けたNYの裏側とは？

かつてジャンキーたちが溢れていたローワー・イースト・サイドは、今やダウンタウンを代表するスタイリッシュなエリアに様変わりした。ここに30年以上住み、ビデオでドキュメントし続ける異色のジャーナリストがいる。クレイトン・パターソン。彼を題材にした映画『CAPTURED』が、この8月に完成。再評価されるクレイトンに、ニューヨーク変貌の理由を問う。

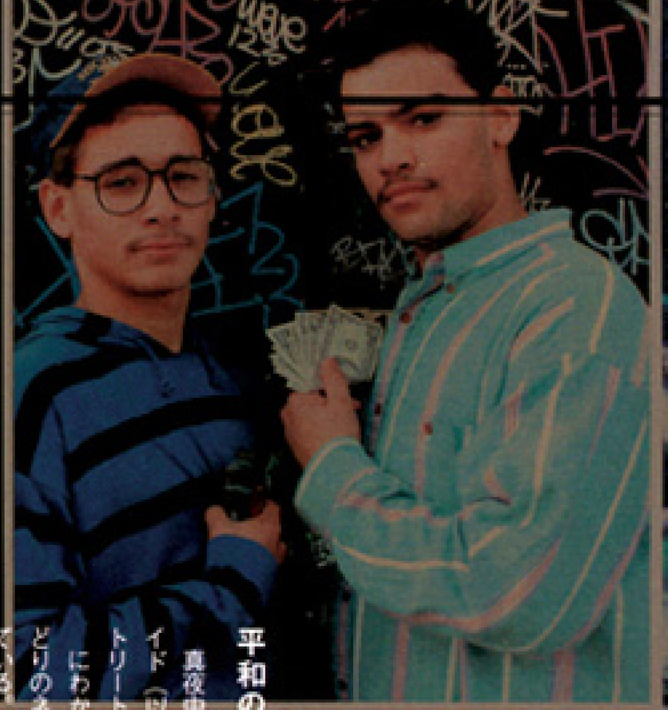
連載 毎日が絶体絶命！
Vol.20

林 文浩 文
はやし ふみひろ●ライター、ファッション雑誌『DUNE』の編集長でもある。過去にソフィア・コッポラ監督映画『LOST IN TRANSLATION』に出演。著書に『外道伝』（発行：リトルモア）。ニックネームはチャーリー。

Christopher Sachs, Clayton Patterson 写真
Justin Shaffer, Masaki Naito コーディネイト
Ribo Azumaya 通訳
Ben Solomon, Dan Levin, Jenner Furst 協力

REAL LOST IN TRANSLATION

街に溢れるホームレス、ジャンキー、ギャング、パンクス、ドラッグ・クイーン……。70年代末にロウワー・イースト・サイドにやって来て以来、この街をドキュメントし続けたクレイトン・パターソンの記録は、まさにニューヨークの曼荼羅（まんだら）である。



平和の都、ニューヨーク

真夜中のロウワー・イースト・サイド（以下LES）、バワリー・ストリート。

にわか雨に濡れた路面に、色とりどりのネオンが万華鏡のように映えている。路上のいたる所から立ち上るスチームの間を縫うように、何台ものイエロー・キャブが眩しい残像を残し走り抜けていく。午前零時を過ぎたというのに、人通りは昼間と変わらない。ミニスカートの女の子たちが、酔っ払いながら無防備にふらつき、クラブの前では、入場を待つキッズたちが嬌声をあげている。隣ではバーから溢れ出た客たちが、路上でお喋りに花を咲かせている。終わることなく続く、週日週末のパーティ。ニューヨーク・ファッション・ウィーク。ファッション誌の誌面を飾る、ケイト・モス、クロエ・セヴィニー、ソフィア・コッポラ、マーク・ジェイコブス、リンジー・ローハン……。シャンパンの泡のような、華麗で儚いひとときを求めて人々はさまよう。夢のようにのどかな時間が、人々を安らかに包み込む。なんて平和な光景なのか。街を徘徊する者は皆、笑顔に溢れている。巡回の警察官さえ笑っている。

ほんの20年前までは、ジャンキーとホームレスで溢れ返り、治外法権の犯罪の巣窟だったLESだが、今や洒落たバー、カフェ、ブティック、デザイナーズ・ホテルが立ち並ぶ、安全で、ファッショナブルで、退屈な、流行の発信地に変貌した。

マンハッタンは、変わった。マンハッタンは、去勢された。権力は、ここを金持ちどもの要塞にするために、自由な貧困者たちをこの地から追放した。猥雑なピンプ、ファンキーなジャンキー、イカしたプッシャー、血塗れのパンクス、グラマラスなドラッグ・クイーン、誇り高きホームレス、陽気なギャング、そして本物のアーティストが、気がつけばこの街から消え失せていった。光が闇を駆逐して残ったのは、ガラス張りの超高級コンドミニアム、流行最先端のブティック、観光客相手のアトラクション、そして、権力に雇われた警備員だけだ。安全と引き換えに、住民は管理、監視されることになったのである。

ただこのマンハッタンの姿こそ、間違いなく巨大都市の中にあるゲットーの未来である。世界中のゲットーも、やがてこの街のように、住民は追い出され、地上げされ、区画整理されて、地価が上がり、高級住宅地やショッピング・エリアとなっていく。ジェントリフィケーション（高級住宅地化）である。市場原理のための浄化である。安全になれば土地としての価値が何十倍にもなり、大儲けができる。こんな美味しい話を放っておく政府やマフィアはいない。追い出された住民は郊外へと移り、そこに新たなゲットーが形成され、両極端な環境の2つのエリアができ上がる。ひと握りの富める者が住む、安全で管理された高級住宅地区と、大多数の貧困層が住む、危険極まりないゲットー。資本主義社会の支配者と奴隷しかいない超格差社会の出現は、遠い未来の話ではない。

CAPTURED

だからといって、LESが文化的に衰退したわけではない。アンダーグラウンドで脈々と受け継がれて来た伝統は、そう簡単に消滅するものではない。街の見てくれは綺麗になっても、ハードコアなスピリットは今でも息づいている。IRAK、ダッシュ・スノウ、ライアン・マクギンリー、ダン・コーヘン、ネイト・ローマン、アズ・フォー、エーロン・ザ・ドン、アガサ・スノウ、リタ・アッカーマン、テレンス・コー……。ニューヨークのストリート・カルチャー、アートシーンの中心人物たちは、今でもここにいる。そして、彼らに続くLESのネクスト・ジェネレーションも着実に成長している。

今年の8月、ニュー・ミュージアムで1本の映画が公開された。ベン・ソロモンとダン・レヴィンが監督した『CAPTURED』である。LESを30年間撮り続けた異色のビデオ・ジャーナリスト、クレイトン・パターソンを通すことで、ニューヨークが変わってしまった理由を問うドキュメンタリー映画である。ベン・ソロモンは語る。

「俺たちはニューヨーク生まれのニューヨーク育ちで、お互いに子供の頃から知っている幼なじみ。17歳の時に、ダウンタウンで初めてクレイトンに会った。以来、クレイトンの魅力に惹かれていったんだ」

2人は、映画学校を卒業すると同時にクレイトンのスタジオを訪れ、映画を制作したいことを告げる。

「この『CAPTURED』が成功した理由は、クレイトンと親密な信頼関係を築いたことにある。そして俺たち2人が、LESのネクスト・ジェネレーションだったということ。過去と現在、この2つの時代に生きるジェネレーションが揃って、初めて可能になったんだ。この映画には2つの軸がある。LESの歴史と、クレイトンというキャラクターだ。この2つのバランスが一番重要だった」

彼らは、80年代のニューヨーク市長、エド・コッチにもインタヴューした。そして、ストリートでのビデオ・ジャーナリズムというクレイジーなスタイルで、警察の暴挙の事実を暴き、記録し続けたクレイトンをビデオ・アクティヴィズム（ビデオ・カメラを持ってルポルタージュするジャーナリズムのスタイル）のパイオニアとして捉えたい。

この映画には、失われつつある古き良きニューヨークの貴重な記憶が、新しい世代のみずみずしい感性で見事に封印されている。

チャイニーズ・ロック

LESとは、ダウンタウンを東西に貫くハウストン・ストリートとキャナル・ストリートの間の、バワリー・ストリートより東の地区のことを指す。

ロック史上に残るジャンキーのギタリスト、ジョニー・サンダースが、LESのジャンキーたちに捧げた名曲がある。『CHINESE ROCK』。『チャイニーズ・ロック』とは、ジョニー・サンダースが愛してやまなかったキング・オブ・ドラッグ、ヘロインの隠語である。彼がこの曲を書いた70年代後半のLESは、昼間からクラック・ヘッド（クラック中毒者）が徘徊する、刃傷沙汰が日常茶飯事の最悪のゲットーであり、多くのアーティストを生み出すアナーキーな地域であった。

カナダのカルガリーに生まれたクレイトン・パターソンが、初めてLESに来たのは79年、31歳の時だった。アーティストを夢見てニューヨークにやって来た彼は、金まみれのソーホーのアートシーンに失望して、LESへと拠点を移す。クレイトンが目の当たりにしたLESは、ジョニー・サンダースの歌そのままの、刺激に満ちた無法地帯であった。

当時の状況を、彼はこう語る。

「当時のLESのゲットーといえば、ハウストン・ストリートからデランシー・ストリートにかけてのエリアや、アルファベット・アヴェニューといったイーストサイドだ。ヒスパニックやプエルトリカンによって多くの事件が起こっていた。アルファベット・アヴェニューは、AからDまであって、Dに行くほど危険なことで有名だった。70年代終わりから80年代にかけて、LESをコントロールしていたのは警察ではなく、ドラッグ・ディーラーたちだった。そんななかで俺は、自分の家の窓に32枚の写真を貼って毎日取り替えていた。その写真は、当時街をコントロールしていた、『ラテン・キングス』、『ニータス』（この2つは今でも存在する）、『ラ・ファミリア』、『33』、『ADT』、『501』ら、ギャング・グループの写真だった」

クレイトンは、普通では決して撮影することのできないスペシャルな人間と、彼らが生み出したシーンを追い続けた。それはまさにLESの歴史そのものであり、同時に冠たるニューヨークのアンダーグラウンド・カルチャーの歴史でもあった。そして、彼の名を一躍有名にしたスクープ映像を撮影することになる。88年に勃発した、トンプキンズ・スクエア・パークの暴動である。

TOMPKINS SQUARE PARK RIOT

トンプキンズ・スクエア・パークでの暴動は、治安の維持を名目に、ここを根城とするホームレスたちを排除しようとする当局の方針への、ホームレスたちの抵抗であった。自由とシステムの闘争であった。そして、この暴動を境にLESは徐々に変わっていく。かつてのゲットーに、カフェやブティックができ、流行に敏感な若者たちが集まってきた。ジェントリフィケーションが始まり、固い絆で結ばれたコミュニティが崩壊していった。クレイトンはこの暴動の一部始終を撮影、警察たちがホームレスに一方的に暴行する映像で問題を提起し、テレビ等のメディアで警察の横暴を訴えた。

「LESから文化が生まれた最大の理由は、とにかく家賃が安かったことだ。街の環境は今よりはるかに悪かったかもしれないが、またネイバーフッド（隣人、近所づきあい）が残っていて、老人や子供たちが街角に溢れ、年齢、職業、人種を問わず、さまざまな人たちが一緒に暮らしていた。本当の悪というのは、このネイバーフッドに入ってきてビルを買い漁り、住民を追い出し、同時に彼らの生活を滅茶苦茶にした、金持ち連中のことだ。一人の人間を殺した殺人犯と、たくさんの人間の人生を壊した連中といったいどちらが悪いのか？ アメリカの凄さは貧富の差から生まれてきたのさ。ジャクソン・ポロック（アクション・ペインティング、抽象表現主義の代表的なアメリカの画家。1912〜56年）、エマ・ゴールドマン（リトアニア生まれの女性アナキスト／フェミニスト。1869〜1940年）、チャーリー・パーカーといったアメリカ文化の担い手は、安い家賃から生まれてきたんだ。だから、ジェントリフィケーションはアメリカの文化を壊したひとつの大きな原因なんだ。トンプキンズ・スクエア・パークの暴動は、まさしくジェントリフィケーション

クレイトン・バターソンと、ローワー・イースト・サイドのネクストジェネレーション、ペン・ソロモンとダン・レヴィン。今日も彼らは街をドキュメントし続けている。ペンとダンが作り上げた映画『CAPTURED』は、クレイトンという不世出のジャーナリストの30年にわたる活動をベースに描かれる。ジェントリフィケーションによって監視、コントロールされ、自由と創造力を失っていく都市の未来に対しての警鐘でもある。

の流れで起きた出来事のひとつ。市長のデヴィッド・ディンキンスは、ストリートをコントロールできないとニューヨークはコントロールできない、と考えていた。俺が撮ったビデオを見てもわかるとおり、あの頃のニューヨーク市警察のシステムは、完全に崩壊していた。警察内にまでドラッグ・ディーラーがいるありさまだった。暴動が起こった当時の市長、エド・コッチが警察のシステムを崩壊させ、その後市長になったディンキンスが再構築した。そして、ルドルフ・ジュリアーニになって、警察と街の完全なシステム化に成功したんだ。このトンプキンズ・スクエア・パークの暴動以降大きく変わったのは、今までドラッグ・ディーラーが支配していたストリートを警察がコントロールするようになったことに尽きるよ。9・11事件を思い出してみろよ。トンプキンズ・スクエア・パークの暴動の時は、あんな小さな公園での騒ぎをコントロールできなかったのに、01年にはたった2時間で、ニューヨーク全体を橋から道路、フェリーまで完全にシャット・アウトした。それほどまでに、警察が力を持ったことに大きな衝撃を受けた。彼らが88年から急激に成長した証拠だ」

なぜ、ニューヨークは変わってしまったのか？

9・11事件を境に、ニューヨークは確かに安全になった。ただその代償として、この街は完全にコントロールされてしまった。そして、金持ち以外は住むことができない街になってしまった。あの危険で、刺激的で、自由に満ちたニューヨークは、過去のものになってしまった。映画『CAPTURED』は、まさにニューヨークの変貌をストリートの視点から捉えた黄色のドキュメンタリーであり、変貌の理由を明確にしてくれる。彼らがこの映画で伝えたかったことは何なのだろうか？

ダン・レヴィンはこう語る。

「現実的な見解で考えれば、昔は家賃や物価が今よりも安くて、いろんな意味で金裕があったから、創造力が街中に満ち溢れていた。でも今はすべての物価が高くなり、街自体がシステム化されている状況で、創造力を働かせる金裕すらないことが大きな問題なんだ」

ペン・ソロモンはこう語る。

「人はどんな時代でも『昔は良かった』と嘆くもので、街自体は勝手に変わっていく。確かに理想を言えば、俺たちが13歳の時みたいに、どこにでも自由にタグが書けて、ウィード（マリファナ）を簡単に買える時代に戻ってほしいと思うけど……こうやって街全体の治安が良くなってい